

Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

No.92

試行錯誤

Forest protection to get Bt800m

Jan. 14
Nation

THE Forestry Department yesterday reaffirmed an 18,000 million plan to strengthen its forest protection force while voicing concern over large-scale forest encroachment by villagers.

Under the plan, the total of 343 forest guard units will be doubled and better equipped, according to Yawki Sarikaphut, the department's acting director general.

The department also plans to buy 9 helicopters to enhance air inspection of forests, he said. The "land and air operations" will for million rai of forest areas where encroachment will be revoked government's flood-prone policy. Roads will also

forest areas to facilitate inspection. The plan was initiated by government's decision to bring the country in a bid to About 4,000 village screening program aimed at communal

How research can help make Northeast green



Villagers quit sanctuary for new settlement

Tuk - About 2,000 hilltribesmen and Thais have moved from a wildlife sanctuary in Uthumphu District to resettle in Phang Pong District.

Col Chalaw Thongphai, chief of the project for resettlement of hilltribesmen and other forest encroachers here, said on Monday the group had voluntarily moved out of Thung Yai Naresuan

wildlife reserve and into designated areas in Phang Pong from early January until late last month.

About 1,000 hilltribesmen from 216 families had responded to the wildlife zone and about 800 Thais from 100 families had responded to a national forest reserve near the highway between Mae Sot and Uthumphu.

Col Chalaw, of the Third Army Region, which is in charge of the project, said that apart from the latest group, more than 4,000 people had moved from Uthumphu wildlife and forest

set on a voluntary basis either next year or a year after at the latest, he said.

Third Army Region commander Lt Gen Si Thongphai, who presided over a welcoming ceremony for the resettled people in Phang Pong on Monday said Thung Yai Naresuan was an important sanctuary and source of water for the Central Plains.

The people resettled under the project will given support to make better living in Phang Pong, north of Uthumphu, Lt Gen Si said.

Resettled people, who are resettled on about 10,000 rai of Thung Yai Naresuan, will be given education, health aid and taught computer skills.

Under the project, 1 resettled people, who are resettled on about 10,000 rai of Thung Yai Naresuan, will be given education, health aid and taught computer skills.

Villagers try to cut through police lines

VILLAGERS fleeing from a Chachangsoe forest reserve tried to break through police lines at Government House yesterday. About 200 villagers from Banan Chai Khut

Government House to meet officials. Prime Minister Chatthol said he asked his secretary-general, Gen Pongthep Singsakul, to look into the problem. If the officials were satisfied

植林や環境問題に関する記事は毎日のようにタイの新聞紙面ににぎわす

特集 村人の生活を奪う植林

タイの山々と私の未来	2
地域循環の回復 — もうひとつの方法	4
私たちの選択	7
生活のできる森林を作りたい	9
タイにおけるユーカリ植林	10
北タイからの報告 — 松の植林が農民を追い出す?	12
投稿 タイ、ラオスの活動地を訪れて	14
いんたびゅう ジュリアン・バンフォードさん	16
JVCNEWS	18
アジア民話の旅 タイ	20

タイの山々と私の未来

タイ事業担当 岩崎 美佐子

タイの村で暮らしたら

「今の生活に満足しているわけじゃない、本当は別にやりたいことがあるんだ」と誰かが言ったら、口の悪い私は「じゃさっさと実行に移せば」と言うに違いない。なんてたって人生はたいして長くはないのだから。

かくゆう私にも、思い続けながらなかなか実行に移せないでいるひとつの望みがある。それはタイ国最北端ナーン県の町はずれ、ナーン川のほとりにある大きい菩提樹の木の下で暮らすことだ。

1986年、ナーンの北部60キロほどの村に20日ほど滞在し、町まで戻ってきて今日はバンコクに帰るという日、ナーンに住む友だちがバスの停留所まで送りがてら、遠回りして町を案内してくれた。ナーンは古い町、どこにも趣がある。ちょっと歩くと、いつのまにか町家ではなく農家が並んでいる。百年前にW. スミスが『Five Years in Siam』にナーンの町を「町と言っても緑ばかり、緑に隠れるようにして家が点在している」と表現しているが、今もそんな面影がある。

どこかの角を曲がったとき、みごとな菩提樹が目に入った。うっそうとした感じで、その木に木造の古めかしい町家が並んでおり、その向うにはナーン川の川面が光っている。私はいっしょに案内してもらっていたチュムとプクに「見てあの菩提樹！」と思わず叫んでしまった。それ以後、この場所は私のなかで「いつか住む終の住処」としての位置を占め続けている。あの菩提樹には屋台のおそば屋さんが似合う、私はそこでどんなおそばを作ろうかときどき考えている。

今のような世の中でいったいどう生きたらいいのかという話をしていたかどうか、いつか、私はアジアの農村の研究者である中村尚司さんにこの話をしたことがある。中村さんは「そんな！理想が高すぎる。欲張りすぎる。そう願って行動して、やっと孫かひ孫の頃に実現したら満足しくっちゃ」と言われた。「ん！」私はそのとき中村さんが何を言っているのかわからなかった。正直今でもわかっていない。欲張りと言われるとこまってしまうが、菩提樹の下への熱はさめそうにない。

さらに、大欲張りにも、タイの田舎で暮らすこともちらちらと考える。こちらの方は誰に話しても笑いとばされそう。都市で怠惰に身体を使わないでいる私に農村暮らしができるかどうか。

農村に住む予行演習のつもりで、私は何回か農作業の共同労働に入れてもらった。田植えは水の中で働くので楽としても、トウモロコシの刈り入れや緑豆の蒔種はかなりきつい。まるで火にかけた鍋のなかで働くようだ。汗は、タイの手拭いでほっかむりしているのに効果はなく、たらたらと目に入りっ放し、身体中から吹き出した汗で、衣類はぐっしょり濡れて身体にまとわりつき、だんだん頭がボーッとしてくる。東南アジアの農民は怠け者だなんてデマを流しているのはいったい誰なんだ！

しかし、もし私が田舎に住むとすれば、年令からして、そうそう力仕事をする必要はない。タイでは農作業の中心になって働くのは10代後半から20代、40過ぎれば力仕事からは引退して年相応の仕事をするよう、うまくできている。もちろん、年寄りがのん気にできるのは、かってしっかり働いたからではある。しかし、私がいきなりその村に住むことになってもあっさり迎えてしまう優しさを持っているのがタイの農村だ。

農村生活の魅力は、人との触れ合いとともに、家畜、植物、自然などと日々喜びを交換できることにある。広がる水田をみれば力がわくし、山はなぐさめを与えてくれる。もちろん実質的にも自然は水、木、食糧、などさまざまなものを与えてくれる。

変わりゆく山河

初めてナーンを訪れたのは1980年、バンナムヤオとソプトゥアン、両難民キャンプを訪問する人同行させてもらったときのことで。次が1986年、この年は3回も行っている。3年もタイに住んでいたのになにひとつタイのことを知らなかったような気がして一念発起、大学院修士課程、地域研究科に入学し、修論の調査のため滞在したときのことで。私のテーマは「灌漑^{かんがい}稲作の行われている地域における社会システムの変容」だったから、北部であればどこでもよかったのだけれど、あえてナーンを選ん



だのは80年の印象があつてのことである。修論の冒頭に、「北部のなかでもナーン県を調査地として考えるにいたつたのは、もとをたどれば、1980年にナーン郊外にあった山岳民族難民キャンプを訪問したとき、市街のたたずまいに魅せられたことと、ひとあし町を出ればどこまでも続く山間狭小盆地のちまちまと耕された棚田に、なんとも言えない郷愁を覚えたことに端を発している」と書いてある。そして、今年の春、2年半ぶりに訪問した。

村に滞在し、人の顔が見えてくるにしたがつて、ナーンは以前よりもっと懐かしいところになった。しかし、訪問するたびにいろいろなことが変わっている。山に道ができた、電気が引かれた、車が増えた、重要な運搬手段として飼われていた象がいなくなった、灌漑用の堰が木と竹のものから、コンクリートのものと変わったなどなど……。しかし、それらの変化すべてを足してもかなわないほどの大変化は、山という山が丸裸になってしまったことだ。数年前から目立つようになってはいたが、もののみごとに丸裸なのは度肝を抜かれた。

タイ北部では、農民は千年の昔から木と竹で川の水を堰き止め、水路を引いて灌漑をしてきた。その堰は大水のときは壊れて流され、水田が水びたしになるのも防いだ。しかし、この十年、政府灌漑局はこの堰作りがたくさんの木を使い、環境を破壊するとして次々にコンクリートの堰に変えてしまった。私の滞在した村でも1985年にコンクリート堰が完成している。その結果、森林伐採は減ったのであろうか、答えは否である。むしろそれを境に決定的に破壊されたと言うことができる。堰を毎年作ったり修理したりするためには村全体の力を結集する必要があった。堰作りにふさわしい木を探して歩くためには広範な森を必要としたし、今年ばかりではなく、来年のことも考えなくてはならなかった。そこで森

は村ぐるみで大切に大切に管理されてきた。コンクリート堰の完成以後、その森はすっかり焼き払われてしまった。

町から道が通じる。トウモロコシという換金作物の種を持った車がやって来る。村人は森を焼いてトウモロコシを作る。また車が来て、収穫したものを町へ運んで行く。この繰り返しは、たった数年で自立的な生活を営んでいた農民の足腰を徹底的に弱めてしまった。急勾配の傾斜地でトウモロコシが栽培できるのはわずか2、3年。そこを捨てては新しい土地を求めて山奥へ山奥へと焼いているうちに、たった10年のあいだに山という山がすっかり裸になってしまったというわけだ。

経済面で急成長をとげているタイにあって、ナーン県のGPP（県民一人あたりの総生産）は減少の一途をたどっている。1978年に4,729バーツだったものは、1983年に半分に近い2,700バーツに落ち込んでいる。ちなみにタイ全体のGNPは、1978年に10,571バーツ、1983年に18,770バーツとなっている。（『Gross Regional and Provincial Product』1983）。また、農業生産高も減少している。山地の森林伐採によって土地の保水力が落ちたため、川の水量が減少し、水不足のためお米の収量が減っているようだ。ここで政府や仲買人の考える最後の手段といったら、まだこのあたりでは使用していない化学肥料の前貸しであろう。それは、やがて重い借金となって農民に最後のとどめをさすことになる。

このように、私の憧れの地は前にも進めない、後戻りもできないという状態であえいでいる。トウモロコシ買い付け国である日本は、豚の餌としてのトウモロコシの栽培に関しては、もはやタイを見捨てて中国にその主産地を移そうとしている。さんざん買い叩き、環境破壊はタイ農民の責任にしておいて、さっさと別の場所に移れる日本はいい気なものである。その陰で、農民たちの失われた安穏な生活は、もう二度と取り戻せない。

そのうちナーンの山にはユーカリや松など乾燥に強く、しかもパルプや建材に利用できる木が大規模植林されるであろう。それはかろうじて残っていた地味を吸い尽くして、あとは不毛の土くれだけが果てしなく続くことになろう。

そうならないためには、今手を打たなくてはならない。JVCが独自の植林を始め、これが広がって北部の山々が豊かな森として回復すれば、私の未来もまた美しいものになるであろう。

地域循環の回復 もうひとつの方法

JVC代表 岩崎 駿介

JVCでは3月より2カ月に1回環境問題に関する連続講座を開いている。この文章は7月26日に行われた講演会の内容をもとに加筆したものである。

●エチオピアとタイの現場で

JVCは、1985年にエチオピアの飢餓の問題にかかわり、飢餓は環境破壊によって起こるのだということがよく分かった。そして現在、世界の多くの国で森林破壊、土壌流出、砂漠化などの深刻な環境破壊があることを知った。一度環境破壊に陥ると、回復は容易でなく、エチオピアでも今後何回も飢餓に見舞われると予測されている。彼らが二度と飢餓に直面しないようにするためには、安定した農業を確立しなければならない。そのために、まず直径20センチ前後のたくさんの石を山に運び上げて、土地を段段状にし、そこに苗木を一本一本手で植え、土壌をしっかりと固定しなければならない。しかし、乾期には雨が少ないため、植えた苗木も半分ほどしか根づかず、樹種もユーカリなどの乾燥に強い樹種に限られている。山に植林して少しでも保水力を持たせると共に、チェック・ダムといわれる小さな堰止めをたくさん作って、雨による土壌流失を防ぎ、さらに堆肥などの有機肥料を作^るって、土壌の改良を進めねばならない。

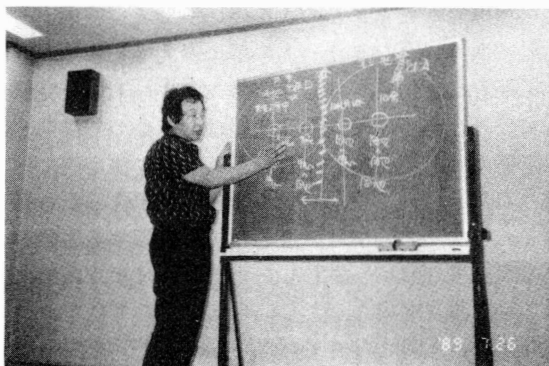
またJVCは、タイでスラム問題に取り組んでいるが、スラムに住む人の多くは、農村から来た人で、彼らになぜ都市に出てきたかを問うと、故郷の村が市場経済システムに巻こまれ、単一作物（mono-culture）を栽培するようになって、不作の年や経済的に価格が暴落する年には、十分食べることができなかったからだと答える。そこでJVCは、農村開発に取り組んだが、ここでもその土地に水をどう引き、土壌をどう改善して行くか、そしていかに森林を回復して行くかという環境問題に直面した。タイでは、1960年代に国土の53%あった森林が、日本などの先進国による材木の買付、不法業者による伐採・密売、あるいは換金作物栽培のための農地拡大などによって、いまでは約18%に減ってしまった。

●日本の生活のなかで

一方、われわれは日本で物質的に何不自由なく生活している。日本や先進国を中心とする国際的な市場経済システムは、ますます拡大して第三世界の隅隅にまで浸透し、資源を得るとともに、でき上がった製品を売りつけて多額の利益を得ている。昔高価だったエビも、この頃では安く手に入るようになったが、これもその一つのあらわれである。しかし、物質的に何不自由なく生活しても、それに比例してわれわれの生活が豊かになっているとは思えないことが多々ある。競争心の強化、人と通じ合えないもどかしさ、自分を自制できない精神の貧しさなどの問題が増えている。このように、際限なく物質拡張主義的に生きていくことが、本当に幸せであるかどうかは疑問が残る。

これらの先進国内部の動きと平行して、地球環境破壊の問題がクローズアップされてきた。地球環境問題は、一つには、フロンガスを使うことによるオゾン層の破壊や、工場からの炭酸ガスの廃出によって地球温度が上昇する温暖化の問題、あるいは大気、土壌、海洋、河川、湖沼等の有害物質による汚染問題などのように、先進国の人々の行為によって直接生ずる環境破壊問題と、もう一つには、第三世界における熱帯林破壊のように、第三世界の現場で引き起こされる環境破壊問題の二つに区分することができる。しかし、いずれの場合も、先進国における拡張主義的な生活様式が基本的な原因となっている。

現代社会において、人間が「生きる」ということ



国際的経済システムは第三世界の隅々にまで浸透している

植林は土地の保水力を高める



は、できるだけ「いい思い」をして、できるだけ「長く」生きるということを意味しているが、このような拡張主義的な価値体系のもとでは、その支配する空間も大きく、使用するエネルギーも増大されて、地球の持つ絶対量と摩擦することになる。

●地域循環の回復

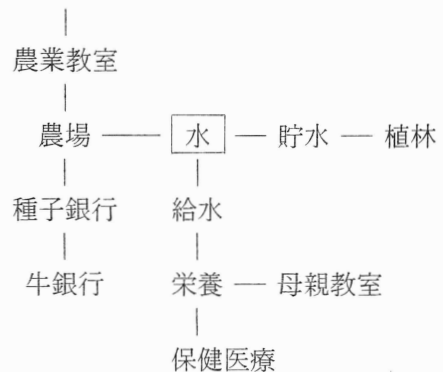
このように、一方で第三世界の人が先進国への従属性を強め、他方で先進国の人が物質的にあり余る生活のために、精神的に慢心して他人の痛みも感じなくなってしまう現代のシステムは、再検討されなければならない時期にきていると思われる。そこで「もの」の長距離で複雑な交換を前提にする国際的な市場経済システムに変わりうる、「もう一つの方法」はあり得るのかについて考えてみたい。

先に述べたように、第三世界の農村部は市場経済システムの末端に組み込まれ、単一作物経済によって少しばかりの現金を得るものの、彼らの持っている自然環境や生活の伝統を売り渡してしまう危険性がある。しかし、タイの農村を良く見ると、自分の周囲の自然環境を傷めず、永続的な生活ができるような生き方を選び取っている農民がいる。このような生活を、一般に「地域循環」を尊重した生活といえることができるが、この人たちの方法は、昔ながらの伝統を基礎に徐々に改良していくものであって、長期的な意味でより安定した生活を営める可能性があると思われる。

ここではエチオピアを例にとって、「地域循環」の回復の方法をより詳しく見てみよう。エチオピアでは、まず「水」をどう制御するかが一番重要な問題である。エチオピアでは、雨期に雨は十分降り水は不足していない。しかし、乾期には降らず極度の水

エチオピア・マーシャ村に見る地域循環の回復

現金収入 — 職業訓練



不足になる。雨期の雨は、強く一度にたくさん降るので、山の土を浸食し、土砂の流出を招く。したがって、降った雨をゆっくりと利用しながら、少しずつ捨てて乾期でも水が得られるような方法が望ましい。「水」は上表にみるように、生活の多くの断面とのつながりをもっている。水の管理をしっかりとることによって、良質の「飲料水」を確保し、病気にならないよう「保健衛生」に気をつけ、さらにこれと関連して「栄養」を十分にとって行くという、食事の問題とつながっていく。

また、水は溜池や貯水池の建設によって経常的に確保できるが、その溜池が雨と一緒に流れ込む土砂によって埋まってしまうために、積極的に「植林」して土壌保全をする。さらに、できた溜池から水を引いて「灌漑^{かんがい}」を行い、「農業」の増産をはかりたい。しかし、その増産のためには、堆肥の作り方や「土壌の改良」を学び、畑を耕すためには牛などの「家畜」が必要という具合に、水を中心の一つのものが、もう一つのことを呼び、その関係は無限に広がっていく。

ここで大切なことは、このような「水」に関わる関係性を、村人全てが知っていることである。決して一部の指導者の知的占有物にしてはならない。とりわけ、毎日「水」を汲みに行き、また料理のために「マキ」を山に取りに行く女性が、環境改善のかなめを握っている。そのため、エチオピアでは「母親教室」を開き、理論と実践を結び付ける努力をしている。「水」をかなめとして相互関連性(integration)を確保することが大切である。

タイの東北地方でもこれと同じように、意欲的な農民が田んぼに池を掘って溜池とし、魚を飼ってその糞を肥料にしたり、その周囲には多種多様な果実

の樹や薬草を植えて土地の地味を取戻し、単一作物を栽培していたとき以上の収穫を得ている例を見ることができる。

●日本における地域循環の回復

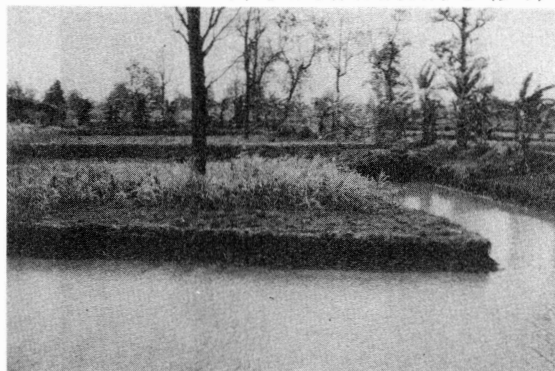
「地域循環」を基礎とする自立的生活の確立は、第三世界の農村部で有効であるばかりでなく、われわれ先進国の側にあっても真剣に考えなければならない問題である。それは先にも述べたように、現代の広域的な「もの」の流れは、第三世界の人を傷めつけるとともに地球環境を破壊し、さらに競争による相互不信を生み出すなどの欠点があり、これに変わる「もう一つの方法」を見つけ出さねばならないからである。

しかし、先進国における「地域循環」の回復は、第三世界における地域循環の回復の試みよりもずっと難しい。それは、台風の中心に近くなるほど風が強く、その流れに逆らって別な動きをするのが難しいように、市場経済システムの中心に位置する先進国内部で広域的なものの流れに逆らって、地域的な「もの」の循環を作りだすことが難しいからである。

先進国における「もの」の流れは、第三世界のものの流れと比較して、次の三つの特徴がある。第一の特徴は、移動の距離が「長い」こと。ものが生産された時点から消費される時点までの物理的距離が長い。第二の特徴は、循環の経路が「複雑」であること。「もの」が、どのように組み合わされて作られたかが、分からないほど複雑に組み合わされている。また、第三の特徴は、目的別にそれぞれの「もの」が対応していて、その目的が完了すると、他の目的のためにそれを転用することなく捨てられてしまうということである。つまり人間の必要としているある機能に対して、一つの「もの」が対応している「単一機能性」という特徴がある。

先進国における「もの」の流れは、長く複雑なために、そのものの「生産者」や「消費者」より、流れの「管理者」がより力を得て流れを支配することになる。したがって、現代の「もの」の流れを変え、地域の生態的な環境を大切にしながら「地域循環」を回復するには、生産者と消費者との関係を、互いに顔の見えるような関係距離にまで「短く」しなければならない。このため、消費者の側では「消費共同組合」、生産者の側では「生産共同組合」という方式が、今後より活性化するだろうといわれている。消費に関する共同組合は、すでに一般化されている

ため池を掘り、多様な作物を栽培する(タイ)



が、生産に関しては「ワーカーズ・コレクティブ (workers collective)」とか、「ワーカーズ・コーポラティブ (workers cooperative)」と呼ばれる新しい動きで、まだ十分に普遍化していない。これらの新しい動きは、コメの自由化をはじめとする日本の非常に強い対外的指向のなかでは、定着するのがしばらく困難であるが、今後の新しい可能性として注目されている。

●曲り角の世界

JVCがエチオピアやタイの農村の現場で模索している「地域循環」の方法は、単にタイやエチオピアの部分的問題を解決する方法だけではなく、今後ひろく世界のあらゆる地域に適応できる原理を含んでいるように思う。地域の環境を傷めず、永続的な循環を守るためには、われわれの現在の生活を改善していかなければならない。

「競争」よりも「個性」を尊重する。「もの」をよりたくさん使うのではなく、生きることについての「基礎的なもの (basic human needs)」と「余剰のもの」とを区別していく。また、分業を推し進めて極度の「専門」や「単一機能」に閉じ込められてしまうのではなく、「多様性」を尊重し、「競争」ではなく「個性」を尊重する仕組みをつくる。いかなる地域も自立的に生きることによって、他の地域に対する「支配」や「従属」をやめ、互いに「共存」する道を探る。

先進国の人も第三世界の人も、いまだに暗中模索の状態にある。JVCの活動も、まだ十分な回答が出ていない。しかし、この世界は確実に曲り角に近づきつつあるようだ。JVCのメンバーが、第三世界と日本との双方の現場で、それぞれの生活をしっかりと見据えながら、新しい方法を見つけ出すことを期待したい。

私たちの選択

〔林 JVC事務局長, 司会〕 ただいま、岩崎駿介の話がありました、みなさんどうお考えになったか、ザックバランにご意見をお聞かせください。

〔喜多 大学院生〕 今日の市場経済システムに中心と周辺があり、NGOがこのシステムの瀬戸際で活動を展開しているという指摘があった。地球全体の状況を考えるとき、当然、NGOだけではできないこともある。たとえば、規模の問題。かりに小さな規模で植林を行っても、それを越える大規模な乱伐があれば焼け石に水である。「点」での活動をどう普遍化していくのが課題である。また、取り組むべき問題として、植林の方法を向上させるとともに、乱伐を止めさせようとすることも必要である。地球規模での環境問題に直面し、皆さんはいかに考え、どう対処しようとするのか。ご意見をお伺いしたい。

〔上田 団体職員〕 今日の話と自分自身をつなげて2つのことを考えた。1つはJVCが活動しているところ、つまり貨幣経済システムの周辺の周辺である第三世界の山を裸にしないためには、中心の中心にいる我々がトウモロコシなどの飼料を食べる豚を食べるのをやめなくてはならないのかということ。もう1つは、ODAのことだ。今年になってやっとODA批判が盛んに新聞に載るようになってきたが、僕の母のように一般的な、この批判によって初めてODAの存在を実感した人たちは、やめてしまえと言うことになる。しかし、建設的な方向でODAを考え、たとえばNGOがODAと植林とを組合せるといった働きかけをしていくべきだと思うが。

〔石田 銀行員, JVCのボランティア〕 ずっと考えていることがある。市場経済システムが整備されるにつれ、構造化され、NGOの働きもシャドワークとしてその中に組みこまれている。貨幣経済の流れを食い止めようとしたらいいのか、それとも行きつく先に新しい価値感があるのか。

私が銀行で働いていて感じることは、一般的な人たちの意識の変革は難しいということ。彼らは流れに逆らいたくない、流れに沿っていこうとする。すると、木が足りなければ、マレーシアから持ってくる、そのため道をつけようとどんどんエスカレートする。このような経済効率を追う銀行や企業とNGOが戦っても彼らは気づかない。経済効率を追った結果なにが起こるのかを彼らに気づかせていくよ

うなNGOがあればいいのに。

〔岩崎〕 批判することによって変革していくのは難しい。しかし、ときには批判も必要だ。僕はある紙上で政府援助は姿を変えた利益追求といい切った。ODAを使わないと日本の儲けはたまる一方だ。根本的にはたまらないように儲けを少なくすることが望ましいが、すぐにはできない。ならばODAをJICA、商社、コンサルタントなど通して技術や物を移転する、つまりそこに住む人たちの生活を無視して援助する方法をやめて、そこに住む人を大切にするNGOを通して使うよう、変えていくべきだ。

〔田島 JVCのOB〕 2年前になるが久し振りにバンコクに行き、みんなの生活が豊かになったのを感じた。システムの拡大によってみんなが豊かになるのではないか。

〔岩崎み JVCタイ担当〕 バンコクだけ見たり、5年前と比べてみると、確かに物は増えている。しかし、それより前の生活と比べて、豊かになったと言えるかどうか。かつて、森があり、その森には小動物、茸、果実など栄養源となるものが豊富にあって誰でも食べることができた。しかし、今ではキャッサバやトウモロコシなど換金作物栽培のために開墾したので森が消失し、不作の年には、現金を手に入らなかった貧しい人たちには米以外には食べるものがないという現象がおこっている。

〔岩崎〕 今の市場経済システムが支配性を強めているのは確かだ。世界中を配下に入れながら成り上がっている。

〔岩崎み〕 一時的にはいい。車エビが高く売れるということでタイの漁村ではみんな車エビの養殖を始めた。ところが増え過ぎて暴落。一見よさそうに見えても実際はそうではない。

〔林〕 環境破壊がさらに進むとどうなるかという認識の度合によって、個人のとり行動は違ってくる。今、何かしなければならぬと分析するのか、それとも今の生活をまだ続けてもだいじょうぶと考えるのか。アジアとアフリカという違いはあるが、エチオピアは環境破壊の行きついたところ。そこでやってきた伊藤さんから現状と、何ができるかを聞きたい。

〔伊藤 JVCのエチオピアで3年間農業指導して6月に帰国。8月からオランダの大学院生〕 エチオピ

アでは今世紀はじめには森林が60%あったのに、今では3%以下になってしまった。はっきりした原因はわからないが、農民が木を切って燃料にし、家を作り、あるいは農地にしてきた。その、生きるためにとってきた方法が、自分たちの首を締めてきたのではないか。人の営みがある限り、環境破壊は避けられないのであろうか。とすればどうバランスをとりながら生きていくか。

〔岩崎〕 エチオピアの飢餓の原因は2つあったと思われる。1つは伊藤さんが言うように、人口増加、降雨量の不足、地形などの自然条件で、もう1つはヨーロッパ支配による人為的影響、その2つの度合は半々だったと見るべきであろう。ヨーロッパという一地域の拡張主義的生活が他地域に及び、その土地の社会のシステムを壊すことによって、自然を無視した生活が出現する。だから、逆に村づくりとか社会システムづくりが大切だと思われる。

〔桃井 元JVCボランティア、商社勤務〕 話がずれるが、ODAや社会構造の問題は政治に似ている。というのは、今まで誰もが自民党はおかしい、おかしいと言っていたけど全然ひっくり返らないできた。それが今回ひっくり返ったのは、消費税のことで主婦や子供が毎日身につまされ、やっと変わった。いろいろな問題、フロンガスのことも、アマゾンの破壊も、なんとなく知っているが身につまされていない。ほとんどの人たちは身につまされない限りわからない。しかし、実際は地球は悪い方向にどんどん行っているわけで、身につまされたときはもう遅いのだけれど。

〔田島〕 僕も同感だ。日本の山ではおじいちゃんが植えた木を孫が切るといふのがある。今の生活が苦しくても先を見て生活した。だからエチオピアで食べられないからといってどんどん木がなくなったというのがわからない。文化の違いなのか、文化が破壊されてそうなったのかもしれないが、次の世代のことを考えていないのが問題だ。今を見て、より経済的に豊かになろうとすると、反比例して環境破壊が進む。環境破壊のコストは自分の世代が払わなくても過ぐすことができる。次の世代にツケがまわるという実感がないから払わない。実感が持てるかどうかということが大切だと思う。

〔喜多〕 身につまされると言うとき、それは「北」の人か、「南」の人か。

〔田島〕 みんなである。

〔喜多〕 第三世界の人々は、もうすでにつきつけら

れているのではないか。ここにきてなぜ環境問題がクローズアップされるに至ったかという点、「北」の人々も無関心ではいられないほどに、事態が深刻化しつつあるからだ。しかし、開発途上国で環境破壊が進む背景には、「南」の人々の間に、『明日の環境を守るために、今日死ぬことはできない』という側面があることも否定できないのではないか。彼らに残された選択の幅は、大きくはないと思う。

〔岩崎〕 喜多さんは具体的にどうすればいいと思うか。

〔喜多〕 具体的施策については一言では言えないが、生態系に根づいた持続的な開発、ひいては持続的な環境という視点が重要だと思う。

〔坂井 商社勤務〕 今日はじめて学習会に参加したが、大学のときから第三世界とのつながりに興味を持っていた。会社は、今日の話とは全然違う社会で、目を通したら捨てるだけの情報を、毎日たくさんコピーし、無造作に捨てる。仕事は森林伐採と関係あり、南米が難しくなったので、今、カナダに目を向け、事業を拡張しようとしている。規模拡大と利益追求でまっしぐら。自分がそれで食べていることにジレンマがある。そんななかで、自分としてはどう生きていこうか悩んでいる。

〔岩崎〕 確かにあなたのいるような中心の中心には隙間がまったくない。しかし、ちょっと離れれば隙間が見つかる。僕は空間の質に興味があるが、都市では空間が人間を拒否するという意味で、質が低下して、貧しい空間となる。

〔岩崎み〕 さきほど、NGOの活動の規模の話があったが、1つの事例を紹介したい。東北タイの農村に、篤農家とNGOが協力して、成功させた複合経営農業がある。これまで、東北タイは自然条件が厳しいため、天水による稲作のほかはキャッサバやユーカリなど、乾燥に強い土壌を痛める植物の栽培しかできず、近代農法のいわゆる土地生産性をあげることでできなかった。複合経営農業は、単一作物農業と正反対のいろいろな植物を混栽する方法で、まず食べることを目的としているが、土壌も痛めないJVCを含め、いろいろなNGOが農民たちに複合経営農家を見る機会を容易するだけで、驚くことにこの農業は広まりつつある。ある村では75%もの農家が複合経営農業をやっており、近隣の11カ村にも広がりつつある。NGOが点をつないで、価値観を変えていくことも可能だ。

(文責 編集部)

環境保全問題に取り組む JVC

生活のできる森林を作りたい

ワティット (通称デーン)

聞き手 正木 幹生

タイではこの4半世紀のあいだに、国土の70%以上を覆っていた森が18%以下に減少した。このため、川の水量が減少し、雨量も減少し、干ばつが起きやすくなった。土地の保水力が落ちたため、ひとたび雨が降ると洪水も起きやすくなっており、昨年11月には南部で死者440余名を出す大洪水が起こった。

タイの農民は今、崖っぷちに立っている。今日を生きたら明日には砂漠化した土地だけが残る、明日を考えれば今日が生きたらならない。

JVCでは、新しく環境保全のプロジェクトを来年にも始めようと努力している。地域開発チームのデーンさんに、環境問題についてお話を伺った。

正木 東北部を中心に、環境保護・東北緑化の名のもとに、政府や製紙会社などの企業主導でユーカリの大規模植林が行われていますが、デーンさんはこれをどう評価していますか。また、農民はどう考えているのでしょうか。

デーン ユーカリは環境保護のためのものではなく、商業的なものです。ユーカリの林ができたら、近くに植えてある果物が見栄えも味も悪くなり、収量も減ったという報告や、野菜が育たなくなったという報告が農民から出されています。ユーカリの植林は痩せ地ばかりでなく、肥えた土地や、ほんの少し残っている森までおよび、農民を強制移住させてまで植えようとしているので、あちこちで農民が抵抗しています。今の時点で、僕にユーカリが悪いという確証はありません。しかし、虫がつかない、したがって虫を食べる鳥も来ないなど、ユーカリの林にはほとんどの生物が共存できないことは、種の数が極端に少ないということであり、これは生態系の破壊と言えます。

正木 では、そのような植林に代わるモデルとしてはどんなものがあるのでしょうか。

デーン 根本的な概念としては、(1)世界経済システムのなかで、農民がその一部の部品としての役割を果たすのではなく、彼ら自らが十分に生きていけ

るものでなくてはなりません。そして、(2)農業あるいは林業が環境循環に合うもの、あるいは人間と自然が共存していけるようなものでなくてはならない。したがって、政府が進めている農民不在の、あるいは農民を労働者としてのみ見なすような植林に代わるものとしては、アグロフォレストリーがあげられます。

植林の方法としては、(A)専門家が乗り込んでいく方法(JICA、西欧のNGOなど)と(B)農民を励ましていく方法があります。現在タイ北部においては、CAREやYMCAなどのNGOが植林を手がけていますが、(A)の方法です。

農民自身が行っている方法とはこうです。

チャチュンサオ県のウィブン村長は、以前48haもの広大な畑を持っており、キャッサバを植えて収入もよかった。ところが価格が暴落、借金を負うようになった。そこで綿に変更、これも一時よく、そして暴落した。とうとう借金を返すため土地を売ると、わずか1.5haだけ残った。自立するためにはその土地から食べる以外はありません。そこで発想の転換をして、伝統的な農業をやることにしたのです。(1)果物など食べられる木、(2)建材になる木、(3)薬になる木などを、高いもの、低いもの、日光を好むもの、日陰を好むものなど配置よく混ぜて植えました。5年たった今ではほとんど自給でき、自家製の薬を売った収入もあります。

また、スリン県のマハユー氏は、複合経営農業を行っています。水田に掘った池を中心に60種類以上の作物を栽培し、ブタや魚も飼っています。自分が食べ、余れば売ります。

ウィブン村長もマハユー氏も仏教の教えに従って農業をしていると言っていますが、半年も乾期が続く厳しい土地で豊かな収穫をあげていることは注目にあたいます。

正木 では、JVCはどう環境保全問題と取り組むのですか。

デーン JVCはアグロフォレストリーを目指します。そして、やさしい、伝統的な方法で農民を励ましていきたいと思っています。誰も入れない森林や商業林を増やすのではなく、その森によって生活可能な森林、さまざまな食糧を得られる森林を増やしていくことが必要です。場所としては山がちな北部、1家族5ライ(0.7ha)ぐらいから始めたい。1家族15ライ(2.4ha)あれば十分生活していける。

タイにおけるユーカリ植林

正木 幹生

森の減少とユーカリ植林

タイにおいても森林破壊は深刻である。タイの国土面積は5120万haだが、1961年ではその約53%に当たる2720万haであったのに、1988年には18%の920万haにまで減っている。平均森林減少率は毎年64万haなのに対して、植林はわずか6400haにすぎない。森林破壊はチーク材の乱伐など古くから発生しているが、主な消失の原因として ①政府による森林の農業用地への転換、②焼畑移動耕作や盗伐、③錫の露天掘りによる森林の直接破壊やその土砂による破壊、④政府の開発計画、たとえば大規模ダム建設、政府代替居住計画などによる破壊などがあげられる。根本的な原因は人口増加だともされているがまだはっきりしていない。

このためタイ政府は、2020年までに失われた森林率を40%にまで高める目標をたてた。その主なものが「東北タイ緑化計画」で、政府だけでなく陸軍も動員して行われている。造林、あるいは植林の目的は、森林回復だけでなく社会林業(social forestry)である。つまり地域住民の生活資材を供給する薪炭材を作り、住民の生活安定・向上や福祉もめざしている。しかし一方では民間企業は、建築材やパルプなどの生産のための林業(industrial forestry)を進めている。

社会林業では主にユーカリが使われている。ユーカリ林は1980年代初期に世界銀行が社会林業計画の中に取り入れたもので、タイでは1981年に王室林野庁とエネルギー庁が農民に植林を奨励し、3年後には商業用としてユーカリ植林が始められた。早成樹、とりわけユーカリの植林が数年来増加した背景としては、①主要農産物の米、タピオカなどの輸出不振と価格の低迷、②転作物の選択の余地がない、③移動耕作が困難なため農地の生産力が低下し、またそのような土地が増加していること、などである。

ユーカリの特性

1987年ごろからこのユーカリ植林がタイの新聞を賑わしてきた。ユーカリというとコアラが食べるものぐらいにしか思われないが、なかなか用途は広い。日本でも街路樹として松戸、名古屋、鹿児島で植え

られている。セルロースの含有量が多いのでパルプ材として優れているし、このセルロースはレーヨン、セロファン、プラスチックの原料にもなる。ほかにも建築材や家具材、薪炭材、またタンニンを含んでいるので薬用にもなる。ユーカリの長所は栽培や植栽がしやすく土壌の好悪を選ばないことである。生長も極めて早く公害や病虫害に強く、また海水や潮風にも強い。しかし欠点もある。生長が早い分だけ土壌の養分をすべて吸収してしまうので、ユーカリを植林するとほかの樹木が育たないなど、自然環境に悪い影響を与えてしまう。また農民の生活、所得、労働形態、食などの社会環境にもあまりよい影響を与えていない。

87年6月には、「ユーカリの功罪に関するセミナー」が開かれたが、これが開かれた理由はタイの王室もユーカリ植林に疑問を持ちはじめたからだといわれた。しかしセミナーでは、ユーカリは経済的に有効で環境にはいかなる危険も及ぼさないと結論づけられた。農業省は植林を続け、農家に対し低利ローンを供給するなどの奨励策を継続している。また同年8月には、チャワリット陸軍司令官が東北タイ緑化計画の一環として東北タイに民間企業が製紙工場を立てることを奨励し、88年10月には、アメリカが同計画に対しトラック16台、道ならし機11台、地ならし機7台、5000万バーツ(=2億5千万円)相当を贈与した。

農民の抵抗

一方、政府の行う植林に対する農民の反応は歓迎的でない。1985年から昨年までに少なくとも11カ所以上で暴動が起きている。県でいえば、ブリラム、シーサケート、ローイエト、ヤソートン、ウボン、プラチンブリなど、東北タイに集中している。1988年の3月にはノンカイ県で農民約2000人がユーカリを育てている地域に侵入し、若木を切りたおし苗木を引き抜いて焼くという事件が起きた。また、同年6月にはプラチンブリ県の村民約3000人が政府のユーカリ植林計画に抵抗して、ユーカリの苗を育てていた造林局の事務所などを焼きうちするという事件があった。



彼らがなぜ抵抗するかというと、ユーカリを植えても食べていけないからである。ユーカリの木はお金になるかもしれないが、そのお金も一部の人の懐に入ってしまったら農民のところにはあまり入ってこないといわれている。抵抗する農民は果樹などを植えたがっている。また実際植えているのに、わざわざそれを切り倒してまでユーカリ植林を行っているのである。植林の目的は森林の回復と農民の福祉なのに、それに反することを行っているようにしか見えない。

タイのユーカリは日本の紙になる

タイにおけるユーカリ植林はタイ政府だけが進めているのではない。米国の石油会社のシェルもそうだし、なによりも日本の企業が深くかかわっている。何のためかといえば「紙」のためである。日本では紙の需要は近年ますます増加する一方である。OA化、情報化に伴い、コンピューター用紙、コピー用紙などの消費は増えるばかりである。毎日必ずみんな紙を使っているはずである。コピーもちょっと失敗したらボンと捨ててしまったり、昔(?)は新聞に挟まれている広告を取って置いてメモ用紙に使っていたが、今ではたいていの人が真っ白い紙を使っている。ふだん無造作に紙を消費しているが、その紙の生いたち、またそれに携わる人々のことまで考える人はまずいないだろう。

紙を作るのに必要なパルプ用材の外材依存率は高まり続けている。1988年では46%になっている。依存率が高まっている理由は、円高によって国産のものより輸入ものの方が安いことと、樹種もそろっていてまとめて大量に買うことができるからである。輸入元は主にオーストラリア、ニュージーランド、北米などであったが、それらの供給に限界が見えてきたので、中国、マレーシア、フィジー、チリ、そしてタイに目をつけるようになったのである。

1986年には、タイのユーカリ等早成樹植林の民間指導普及団体である The Tree Farmers Association of Thailand (TFAT) の理事長が来日して関係企業などに協力、援助等について要請しており、それに応えて日本製紙連合会をはじめとする製紙関連企業が、1987年にタイにおけるユーカリ植林動向とチップ輸出の可能性に関する調査を行っている。また88年にも、前回の調査を踏まえたうえでより具体的な調査を行ったが、環境問題に関する調査結果は平坦地における問題は考えられないというものだった。

もちろんタイの企業もユーカリに目をつけている。タイ最大の木材会社 Yuan Heng Lee Wood Industry Co. Ltd はすでに1600 ha のユーカリの植林を行い、さらに3200 ha 以上行う予定である。その市場としては国内ではなく、日本や台湾を考えている。

誰のための植林か

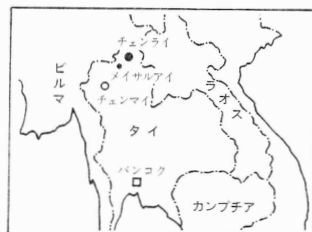
近頃のタイの新聞を読むとユーカリの栽培は中止される予定とも書かれている。しかし私はユーカリ植林は中止されないと思う。日本の企業利益とそれを支える可能性のあるODAつまり日本政府、シェルなどの多国籍企業、タイ国内の大企業、それに一部の特権を持つ人々。ユーカリ植林が彼らの共通の利益目的である以上それは変えることができない。ユーカリ植林についてなお賛否両論があるのは事実である。もし本当に良くない場合どうしたらいいのか。植林をして土壌が悪化して使えなくなるのを待つか、それとも今世論を喚起して本来の目的にかなうものを見つけるかのどちらかではないだろうか。

私自身この7月、タイ中部のロブリ付近でユーカリを植えた。学生100名ほどで半日行った。ユーカリの苗木を手にするまで私は何をするのかわからなかった。どの学生も特に何も考えずに一生懸命植えていた。農業大学の学生でさえこうである。

学生に限らず、みんなが問題意識を持たなければユーカリ植林について再考する機会すら失ってしまうであろう。またこれはタイ人だけの問題ではない。植林によって利益を得る日本企業、つまり日本人の問題でもある。私たち自身、誰のために植林が行われるべきなのか考える必要がある。

正木幹生：カセサート大学農学部にて'89年6月から留学中。ユーカリの植林が及ぼす影響について調査・研究している。

松の植林が農民を追い出す？



松による植林

かつて、チェンマイあたりの乾いた涼しい傾斜地に見られたタイ土着の松によって、北タイの表情が変わろうとしている。これらの針葉樹が、裸の山を再び緑にするという期待はあるが、松の登場に誰しもが満足しているわけではない。

今までの数々の北タイ、東北タイの植林プロジェクトと同様に、唐突に始まった単一樹木の植林は、北タイの農民たちを困惑させている。

「最初は何にも知らなかった。だけど、何年かたって松の木が土壤を痛め、他の植物を育たなくすることに気がついた」とワウエー郷センチャロン村の村長、ボーシュウ・ジュボンは言う。

タイの村（訳者注：北部では、平地にユアン、タイルーなどタイ系諸族、山地に多種の山岳民族が住んでいる）の村長たちが、2月にメーサルアイ郡庁で、少数民族の村民と会い、同じ立場にある者同士として、彼らの農地に、あるいは農地の近くに松の木を植えることについて意見交換した。

広大な松の造林区の近くに住む農民たちの反対は、広大なユーカリの植林に直面している東北タイの反対者たちに呼応した。彼らは松の木は土壤酸性化の原因となり、落ち葉は肥料とならず、いっそうの土壤流出を招くと指摘した。

しかし、王室林野庁の専門官は、北タイの木の種のうち、二葉松 (pinus mercusii) が、大規模な再植林には理想的な種であると主張している。今までのところ虫がつかず、病気も出ず、成長が早く、乾燥した急斜面にもよく育つ。そして、繊維が長いのでパルプや紙の材料として最適である。

これらの理由から、商業ベースで、あるいは保護林として、または目的は曖昧なまま、彼らの土地がどうなるのかという農民の不安を残したまま、松の植林は北タイの山に急速に広がりつつある。

森を破壊したのは誰か

チェンライの北部地方の森林をこの十数年急激に破壊したと、センチャロン村のアカ族の村長ボーシュウ・ジュボンら少数民族の人々は、世間から非難され続けてきた。しかし、中国南部からタイ、ベト

ナムの山地に数千年にわたって住んでいる森の住人たちは、彼らが森林を破壊したのではないと主張している。

一般的な認識に反して、アカ族の人々は移動耕作をやっていない。彼らはある土地では輪作し、ある土地では一定期間休耕して畑を森に返すという、高度で複雑な土地利用方式で、ローテーション耕作をやっている。

「子供たちは年寄りからアカ族の文化は生き残るためのものだってことと、変化への適応だってことを学ぶんだ。私たちはいつも外からの政治的な力で一カ所に長く住むことができなかったからねえ」と彼は言う。

ボーシュウは、彼らの文化——歌、物語、信仰、実生活——のなかに森林保護はしっかり埋め込まれていると強調する。「それは我々の生存に必要なからだよ。もし森がなくなったら、我々はどうやって生きることができる？」

そして、ボーシュウは、センチャロン村周辺の山々がこの十年余りのあいだにどうして緑から茶色に変わってしまったか、彼の考えを述べた。

「1979年、林野庁が道路を建設した。翌年、『チェンライ製材会社』が来はじめたよ。道路ができるまで、ワウエー郷はまだ森に囲まれていた。商業伐採が森林破壊のおもな原因だよ」

彼は製材会社が林野庁地方役人と結託して、広範囲にわたる密伐採をしているのを目撃している。彼らは伐採許可量以上の木を切ってそれらを放置しておき、ほとぼりが覚めたころ回収に來た。「これが彼らの手口だよ」と彼は言った。

「みんなが我々のことを森林を破壊したと非難している。しかし、山岳民族のいない南部や東北部はどうだね。北部より森林破壊はもっと進んでいるじゃないか」と彼は結んだ。

ボーシュウの主張は、ほとんどのアカ族が他の少数民族と同様にタイ市民権を獲得していない、したがって土地所有権を持っていないことで、力を持たない。彼の言葉は、山岳民族と森林破壊が因果関係にあるという一般の人たちの先入観に太刀打ちできず、はかなく消えてしまう。

バンコク在住の森林担当官は、ワウエー郷の昨今について語っているが、森林破壊の原因についてボーシュウのとまったく正反対の見解を述べている。

『チェンライ製材会社』は昨年まで操業していました。生態系の破壊という意味で、彼らも少しは損傷を与えたでしょう。しかし、山岳民族の人口増と焼畑による損傷に比べれば、ゼロに等しいですよ。とにかく密伐採するなんて不可能だ。我々が道路でしっかり見張っているのですから」

植林によってもたらされるもの

センチャロン村を通り抜けて2キロほど行った埃っぽい道沿いに、列に植えられたユーカリに覆われた林野庁の水源地流域管理課の育苗場がある。敷地には、松、チーク、ユーカリ、アカシアなどの、なかにはまだたったの1インチほどしかない苗が、何千本も整然と行列している。

管理課は、森林を守り水源を保護するため、1981年から植林をはじめた。このプロジェクトは、ドイツからの二国間援助によるワウエー郷の総合農村開発事業の一環である。

育苗場の担当官は、彼らがこの十数年、およそ80haの植林——そのほとんどは松であるが——を指導してきたと述べた。

「山岳民族は森林破壊の元凶ですよ。彼らが森を焼いて移動耕作をするのが、土壌流出の原因です。最初のうち、山岳民族は我々がやっていること、植林が水源地を守り、水の保護をしているという関係を理解していなかった。彼らは耕作地を失うんじゃないかと怖れていました。しかし、今ではもうみんな理解していますよ」と彼は言った。

「木の根が深く伸びると、土壌が谷底へ流されるのを防ぎ、水循環をよくします。人々は、まだ木が小さい最初の5年間は苗木のあいだを耕作することができます。そして、木が成長したら、別の区画に移るんです。松を植えると水源地を守ります。我々は、やがてこの地域の70%をしめる急斜面にも植林区域を拡大したい。1年に80ha植えるとして、ワウエーを緑にするには10年以上かかりますよ」と彼は強調した。

ボーシュウはしかし、今後について不安を隠しきれない。「森林担当官は、私たちがここでずっと耕作できると約束している。しかし、今までずっと裏切られ続けてきた。彼らは苗木のあいだに栽培していいと言うがこれも嘘だ。酸性の土地には何も育ち

はしないよ」と彼は言う。

ワウエー郷の大半は国有森林保護地域に指定されている。そして、調査されたことがないにもかかわらず、バンコクの担当官たちは、この地域の70%はなんらかの水源保護指定区域に分類されると考えている。

これは、ワウエーに住いを構えているタイ、中国、アカ、リス、モン(Hmong)やその他の民族の人々には本当に辛いことだ。林野庁の記録によると、ほとんどの少数民族の人々は市民権を持っておらず、わずかな人たちが土地所有権を持っているに過ぎない。

ボーシュウは、松の植林の拡大によって村人が徐々に土地からはじき出されるのを恐れている。

「毎年80haずつ松の木を植林する。すでに数家族は耕作地を失って、どんどん貧しくなっている。おしまいには、みんなが米を作る土地を失うことになるだろうよ」と彼は言った。

伝統的な土地に植林地が拡大するにつれ、たくさんの人たちを巻き込み、たくさんの人たちが土地の問題に直面し、松の生態系に与える影響への議論が高まっている。

そして、水源保護地域は結局は商業材源として役立つという長期の展望もあるようだ。

ワウエーの森林担当官は、松の木が「水源保護」のために選ばれたおもな理由として、その多目的に使える経済的な有用性をあげている。

「松は松脂として使え、紙を作ることもできます」と彼は言う。ちなみに高地では、この2年間、土壌保護のため松に代わってユーカリが植えられた。「ユーカリは紙としても建材としても使えますから」と彼はつけ加えた。

ワウエー郷を水源——一般的には、水源保護の森林にはまったく手をつけてはいけな——と分類したことははっきり矛盾するが、バンコクの担当官は、将来、「もし企業がこれらの松の木を買いたいと言ったとき、我々の財産となりますよ」と認めている。

事実、ワウエーで使っている松の苗木は、チェンマイ県ホッド郡の造林課の商業植林地からきている。ホッド植林地の材木はチェンマイにある日本の使い捨て割り箸工場に売られている。

アン・ダナイヤ・ウシヤ
(THIRD WORLD NETWORK)

海外の現場と呼応した 国内プロジェクトを

東村 康文

今年6月から7月にかけて、JVCの活動現場であるタイとラオスを2週間ずつ訪問した。私は昨年の夏よりJVC東京の国内活動を手伝ってきたが、今回は最初の訪問であった。約1年間の国内活動の中で、現場の状況はかなり聞いていたが、それだけでは具体的な人間の顔が見えず、やはり自分は本当には理解していないのではないかという不安感が常につきまとっていた。そこで、ラオス担当の谷山さんがタイ・ラオスに行かれる時期にあわせて、現場の訪問をさせていただいた。

今回の現場への訪問は、私にとって、自分のこれからの活動（国内にせよ国外にせよ）をやる気にさせてくれた。自分自身もプロジェクトを持ちたいとも思った。普通外国に行くと、そのままそこに居たいと考える人が多いようだが、むしろ早く自分の仕事にとりかかるために、日本に帰りたくてしかたなかった。そして帰国すると、JVCでは9月に開かれる「地球環境と日本の役割を問う国際市民会議」の準備、GREENプロジェクトの実施、そして環境問題・農業についての本誌の特集など、環境問題に関する関心が高まっていた。そこで、この原稿を書きながら、必然的に、活動現場で感じたことと環境問題へのJVCとしての取り組みについて考えることになった。

*

*

難民キャンプ — JVCの原点に触れる

インドシナ難民のキャンプは、JVC発祥の地であり、JVCに参加した人あるいは参加している人の参加動機を理解するうえで、重要である。パナニコンのキャンプで日本語教師として働く竹村さんの言葉に、まずそれをみることができた。「私は難民がパナニコンで置かれている状況、つまり、どうしても日本語を学ばなければならない状況があるので、それを最大限に満たす必要を感じている」

この訪問を機会に、トライアル&エラーを紐といて、JVCの初期の頃にインドシナ難民キャンプで救援に奔走したスタッフの方々の言葉をさがしてみた。

「悲惨な難民の状況を考えると、もうじっとしてられない。(西崎)」、「今、自分がしなくてはならない仕事が目前にある、とそのとき感じJVCに加わり、難民キャンプへ一年半とどまりました。(林)」、「言葉の前に行為があった……西崎追悼文(田島)」、「大学卒業後トラックの運転手などのアルバイトで、100万円を工面し、昨年の5月からJVCの活動に参加。(竹内)」、「インドシナ難民のことを新聞・テレビなどのマスコミ報道で知り、居てもたってもいられなくなりタイへ行きました。(簗田)」、「圧倒的な状況の中で、無力とも見える私たちであるが、14歳のプラティープさんが大きな船の赤さびを落とす仕事をしながら、ただ一人小さなお金を貯め、あのクロントイ・スラムで子供のための学校を創っていった志に学びながら前進したい。(熊岡)」など、どれも心意気に満ちた言葉である。

今回のタイの難民キャンプ訪問によって、ボランティアの原点について考える機会がもてたことが大きな収穫であった。

ラオス — 人々の自主性を重んじた援助を

インドシナ難民の緊急事態が去った今日、JVCでは、難民の本国であるラオス、カンプチア国内の生活基盤の整備をすることが難民の帰還のために必要であり、難民を出さないことにつながるという考えのもとに、それぞれの国内でプロジェクトが始められた。幸いにも私は、難民キャンプの訪問の後、難民の本国のひとつであるラオスに行くという、JVCの歴史に沿った形で現場を見ることができた。

その国を書面でしか知らないうちは、ひとつの集団として貧しいということしかわからない。しかし、その貧しさにもいろいろな生活状況があり、どこをどう援助していくかは、地道に対象地域の一人一人とつきあって明らかにしていくしかない。

ラオスの人々は、政府の役人も公務員も農民も商人も貧しい状況におかれている。たとえば、公務員ですら給料の遅配が数カ月におよんでいる。これに加えて、農村部では基本的な衛生状態が悪い。ほとんどの人が同じように貧しく、役人だからといって金を多く持っているわけではない。しかし、人々は自分なりに一生懸命いろいろな工夫をして生活をささえている。この自主性を重んじる形で援助を行わなければならない。

たとえばビエンチャンの20代前半の女性だが国の経営している都市計画の会社に勤めている。4人姉

(注) Glocal Rivers Environmental Education Network

妹で生活している。給料は本来の額の三分の一しかもらっていない。当然、食物が買えない。食べ物はほとんど自分の故郷から送ってもらう。その運送は知合いの飛行機のパイロットに頼んでいる。また、地方都市であるパクサンの国際部担当の役人（知事の相談役くらいの地位的立場）の場合。給料だけでは足りないで、自分で田畑も耕している。また自分の家の前で、自分の子供にお菓子を売らせて現金収入にしている。ある食堂のおばさんは、商売である程度の収入を得ているので、貧乏な自分の姪や甥、それに近所の子供まで食べさせている。また、それでも食えなかった人は、経済難民として外国に出ていく。ラオス担当の谷山さんの話では、「難民として第三国に定住した家族からの送金が重要な現金収入になっている場合が多い」ということである。

これはこれで貧しいながらもお金と食糧がうまく循環しており、かたよった富の配分が現出していない。フィリピンなどのように、金持ちが賄賂を使って政治をつかさどっていくというような国に比べれば、天国のような国である。

私たち日本人よりもラオスの方が、はるかに知恵を働かせて生きている。調べていけば、いろいろな知恵が明かになってくるであろう。こういった中で、我々が現場から学びとることはたくさんあると考えられる。そして、我々外国人が彼らに何を提供すればよいのか、慎重に考える必要があると痛感したのであった。

NGOと環境問題

9月8日から10日まで「地球環境問題と日本の役割を問う国際市民会議」が、JVCをはじめいくつかの民間団体や個人の呼びかけのもとに開催される。私が、タイ、ラオス、フィリピンから帰国した際には、すでにプログラムが出来上がっており、着々と準備がすすめられていた。

最近、政府においても民間においても環境問題論議が盛んになってきたが、その解決の展望はまだまだ見えてこない。危機感をつくりだすことにはほぼ成功してきたが、それ以上の一歩踏み込んだ解決策の提示、具体的なプログラムの提示には至っていない。今は、「我々が経験してきた近代化とはいったいなんだったんだろう？」という反省をしている段階である。

私自身、今から約5年前に環境科学研究科という所で勉強し、学生・教官を交えて環境問題について

の討議を何度も重ねてきたが、やはり、何か一歩進んだという感じがしない。当時、川喜田二郎という文化人類学の先生が「環境問題は昔からあった事であるが、問題として認識されはじめたのは最近であり、我々教官側にそれに対する専門家はいないし、回答も持ちあわせていない。あなたたち若い人が自分で問題を発見して、問題解決の方法を提示していくしかない」と言われた。

環境問題は学際的な問題をはらんでいるので、これにアプローチする場合ふたつの方法しかない。ひとつは、地域的に限定してほぼ完全な状態で問題を把握すること。もうひとつは、グローバルな範囲で重要そうないくつかの要素に分解して、それらの要素間の関係や構造のみを見ることである。

NGOが環境問題にアプローチする場合、NGOの特性と長所からして、前者のアプローチを選択するのが賢明な方法であろう。というよりも、NGOでなければそれができないということを、今回の現場の訪問で確信した。特にラオスで谷山さんと前田さんに密着して現場をまわり、ラオス人側との間で多くの誤解や不明点が生じながらも、お互いに理解しあおうとする姿勢を常に持とうとする点に問題解決の希望を感じた。

JVCで現在進行中のエチオピアのマーシャ村における総合的復興援助は、バックグラウンドとしては環境問題に立脚しながらも、具体的に村人の生活向上をめざしている点で非常にNGO的であり、かつ成功している例であると思う。

私の意見では、こういった海外の環境問題プロジェクトに並行した形で、国内にも活動現場を持つ必要があると考える。その理由はふたつある。まず、外国では自分が外国人であり、何年間かしかそこで暮らさないから、その住民と同じレベルでその地域を理解することはほとんど不可能だからである。自分が熟知した地域（できれば生まれ育った所）で、同様なプロジェクトを持ち、常にそこで学びながら海外に出ていった方が、海外の現場の中だけで試行錯誤するよりも問題が明確になるような気がする。また、もうひとつの理由は、海外の現場で学ぶことが数多くあり、それを日本で還元する所を持つことが必要だと思うからである。これらの点で、海外と国内の両方のプロジェクトを賢く運営していくことが必要だと思う。全然現場のことを知らない私の意見だが、以上のことが自分の悩みでもある。

チャリティ・サイクリングで「飢餓をなくそう」と訴える ジュリアン・バンフォード さん

昨年²⁰¹⁶の寄付のうち半額は自己負担！

「チャリティ・サイクリングに、お金は順調に集まっていますか？」

「最初の年と次の年は100万円でしたが、3年目は600万円がゴール（目標）でした。支援する団体が6つになりましたから、ひとつ100万円として……。みんなから集まったのは300万円ですが、自分の金で300万円ありましたから、大丈夫でした」

「えっ！自分のお金を？」

「はい。お金は意味がないのです。いいことができれば、それでいいのです。」

* *

7月末の土曜日の昼下がり、日本縦断のサイクリングに出発する直前のジュリアン・バンフォードさんと会いました。場所は東京・新宿の地下の喫茶店です。地上では「最後のお願いです」と参議院選挙の候補者たちが声を張り上げていました。

4年目をむかえるチャリティ・サイクリング、飽きやすい日本人のことですから、だんだん関心が薄れてきたのではないかと心配していました。それでまず、これまで3回のお金の集まり具合を聞いてみたのです。その問答が最初の会話です。

夏休みを潰して、炎天下を自転車で走り続けて、そのはてに300万円も自分の金をボランティア団体に寄付する……。意表を突かれて、インタビューの調子が狂ってしまいました。

「今年は日本の皆さんと一緒に走りたい」

「今年の予定は7月29日に宗谷岬をたって、8月26日に沖縄に着きます。去年は3週間でしたが、今年は4週間の予定です。去年は1日160キロ以上走りましたが、今年は100キロぐらいです。去年のスピードでは他の人と一緒に走れませんし、トラックの大道（おおみち）ばかり走りました。今年は小さい道を、1, 2, 3人……ボランティア団体など、いろんな人とサイクリングを楽しむと思います。朝の出発時間も、去年の5時半から1時間遅らすことにしました」

どうしてチャリティ・サイクリングを始めたのか、という本質的な話題には入らずに、質問はあらぬ方

に進みます。これも動揺のせいです。

「実際走ってみて、日本の景色はいかがでしたか」

「北北海道は住んでいる人も少なく、風景も丸みを帯びて、イギリスの300～400年前の風景に似ています。それが音威子府（おといねっぶ）と旭川の間で景色が変わり、本物の日本が始まります。あとは南九州まで大きな道といっぱいの人、同じ雰囲気です」

イギリスはバンフォードさんの故郷とか。ついでに、歳の話になって、バンフォードさんと私が同じ40歳であることがわかります。『エライ違いね』といったのは、同い年であることを知ったT & E編集長のMさんです。（言われなくても私が一番気が付いているわい……）

「毎年、コースはちょっと変わります。山形ではTREE FOR LIFEの会がいいサポートをしてくれるのでよく寄ります。自転車旅行中は民宿や旅館、大道ではビジネスホテルなどに泊まります。大学の学生（ジュリアンさんは文教大学の英語の先生です）の両親の家や、団体のサポーターの自宅にも。1回か2回はすばらしい温泉旅館ね。

泊まる場所も、食べものも、たいいてい自分で払いますが、親切な人にご馳走してもらったりもします」

ここまで読んで「分かっていたら一緒に走ったのにと、自分の家に泊まってもらったのに」なんて思った人もいることでしょう。なにせ、この記事の載った『T & E』がでるのは、サイクリングが終わったあとなのですから。今年順路にあたった稚内、音威子府、札幌、小樽、函館、青森、秋田、盛岡、山形、仙台、郡山、宇都宮、東京、清水、浜松、名古屋、彦根、大阪、岡山、広島、山口、飯塚（1回目のサイクリングのとき、とても親切にしてもらった町だそうです）、熊本、水俣、鹿児島、沖縄のみなさん、御免なさい。やむをえません。「来年はぜひお寄りください」というメッセージとカンパをお寄せください。

「いつも2日目が一番苦しいね。あとはだんだん強くなって、体にいい生活です。はじめから、終わりでまで、お尻が痛いのは自転車では仕方ない……」

日本人が変わりつつある

「1回目はNHKの全国テレビのニュースになりました。2〜3回目はローカルニュースですが、毎年、皆さんの興味はあがってきていますよ。4年前と比べると、飢餓とかODAとかいう言葉に親しんできています」

これは体勢をたてなおして、最初の心配、日本人の飽きやすさを心配した質問に戻ってきたときの答えです。

「変わったことを4回もやると、皆さんがどうしてだろうと、思ってくれます。それにマスコミ、周囲、スポンサーなどに、連絡したりとかが上手になりました。講演、手紙、スピーチ……。時間はかかりますがよく働けばよい結果がでます。

その土地の新聞やテレビで報道されると、走っているときに、車を止めて応援してくれたり、お金をくれたりする人も多くなりました。3週間前、旭川の人から手紙がきました。彼は、私の新聞記事を読んで、日本人もやらなければいけないと、同じように自転車で日本縦断したと書いています。まだ会ったことはないのですが、連絡してありますから一緒に走ることができるでしょう」

どうやら飽きやすさはでてないようです。ホッ。質問は核心に迫ります(?)。

「私がチャリティ・サイクリングをする目的は3つあります。まず、NGOのためにお金を集めることです。今世界で、1日35,000の人間が、飢えで、あるいは飢えで衰えているために簡単な病気で死んでいます。その4分の3は子どもです。その人たちのためにプロジェクトを実行している団体を助けない

のです。

2番目は普段生活していると、この悲惨な状態にある人、世界の本質を忘れてしまいがちです。私自身を含め、このことを考えるために走ります。

3番目は、これが一番肝心なことですが“普通の生活をしながら、誰でも、ひとりの人間として何かができる”ということを、訴えたいのです。もちろんそれはたいしたことではないでしょう。しかし、GIVE UPしてはいけないのです。私は戦い続けたいのです。

さあ、みなさん、飢えを終わらすために、開発するために、なにかをしましょう。私と同じことをする必要はありません。あなたにできるなにかを。一番簡単なことは、私にカンパすることですが……」

その日のインタビューは、これで終わりです。しかし、1日置いた月曜日、バンフォードさんからFAXが送られてきました。次のようなメモがありました。

「NGOのボランティアの方々に心からお礼を言いたいと思います。彼らの助けなしでは、このサイクリングは何の意味も持たなくなるからです。また、私は自分の人生の一部を飢餓をなくすことにささげる決意をしていますが、サイクリングはあくまでもひとつの手段であり、すべてではありません」



カンブチア・チャリティー・コンサート

▶7月22日、六本木のフランシスカン・チャペルセンター（カトリック教会）で、第1回カンブチア・チャリティーコンサートが開かれた。出演は、新星日本交響楽団室内楽合奏団で、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの弦楽四重奏。当日は、演奏が行われた礼拝堂の360席がほぼ満席で、前半はモーツァルトの弦楽四重奏曲を2つ、後半は愛の讃歌やイエスタディなどのポップスやハイドンのセレナーデなどで、楽しくて親しみやすいプログラムだった。普通のクラシック・コンサートとは違って、一段だけ高くなった小さなステージの上の4人の演奏者を、コの字型に囲むような客席で、とても身近に聴くことができた。

▶またJVCでは、開場の3～4時間前から教会のキッチンで、サンドイッチ、ココナツミルクのゼリー、コーヒーなどを作って、軽食・喫茶コ

ーナーを用意した。パン180枚分の山のようなサンドイッチが出来上がった時は、売れ残ったらどうしようと皆で心配していたが、予想に反してあっという間に完売してしまった。ボランティアとしては、本当に楽しく参加することができた。

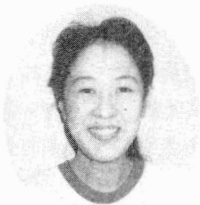
▶今回のコンサートは、JVCとSHARE（国際保健協力市民の会）の共催で、コンサートが始まる前に、スライドを上演しながら30分ほどの講演があった。話をされたのはSHAREの代表の本田徹先生（医師）。

▶「カンブチアは今ベビーブームで、



1人で毎年のように子供を産む人がいる。でも、衛生環境や栄養状態が不十分なために、1000人の新生児のうち132人が1歳未満で死んでいく。カンブチアの人は、今生まれてくる子供たちは、ボル・ポト時代に虐殺された命の生まれかわりだと考えている。カンブチアは仏教国で、そのようなことが「輪廻」「転生」と結びついて本気で信じられている。他の場所で聞いたら他愛ないことだけれど、この状態のカンブチアで聞くと、こちらも本気にせざるを得ないような気がしてくる。せっかく生まれてきた若い命を栄養失調などで失ってしまったのは、ボル・ポト時代に消えていった若い命がどうにも浮かべられない。同じアジアの一員として、自分も何とか力を貸したいという気持ちになる」と、去年約3カ月間にわたるカンブチアでの活動を中心に話された。（金成）

エチオピアとカンブチアでがんばりま～す



田尻真由美さん

▶7月から2年間の予定でエチオピアへ行く田尻さんは、以前から第三世界に興味があり、大学ではそのために栄養士の資格を取った。

▶「病院で栄養士として働いたこともあるけれど、そこでは病気に合わせて食事を考え、カロリー計算をする事務的な仕事。エチオピアでは、栄養失調で抵抗力がないので下痢をしても死んでしまう。そういう食料の種類も量もないところで、現地の状態に合わせて栄養のことを考えるのは難しいことだと思う。『こうしなさい』と言われないところで、自分がどれだけできるかわからないし、

不安だけれど、考えるところがあるとも言えない、周りに合わせてしまうような自分を、日本で受けた教育・社会の慣習のわくにとらわれずに開放したい」。

▶出発を2日後に控え、準備に忙しい田尻さんだったが、年齢が私と近いせいもあって、色々と話がはずんだ。自分で見て、感じて、何かつかんできたいという田尻さんの気持ちが伝わってきた。



本橋 栄さん

▶8月15日から1年くらいの予定で、カンブチアへ赴任する。どんな仕事をするかは現地へ行ってからでない

とわからないということだが、現行のプロジェクトの運営・調整などだろう。

▶JVC設立以前から海外協力で携わってきたという本橋さんは、'82年の春頃からボランティアとしてJVCに来るようになり、その年の9月からはスタッフとしてT&Eの編集を担当した。'84～'85年までタイのバンコク事務所へ赴任し、'86年から3年半ほどUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）で『レフュジーズ』の編集など広報の仕事をしてきた。

▶話をしていて、難民の定義の不確定なことや、NGOの性格、JVCの立場など、ちょっと質問するだけで色々なことを教えていただいたのに、うまく書けないのが残念だ。「JVCもずいぶん変わってきたと思う。柔軟な対応ができるのがNGOのいいところ。現行のプロジェクトのほかにもまた新しいことも始めるかもしれない」と言う本橋さんだった。（金成）

11月3～5日に淡路島で会いましょう

市民とアジアをむすぶ国際フォーラム '89 関西

国立淡路青年の家&淡路島の“あちこち”にて

国際リゾート地域に指定された淡路島を舞台に、11月3～5日の2泊3日、「第2回アジア市民フォーラム」が開催される。JVCなど首都圏のNGO関係者が中心となって昨年3月、神奈川県小田原市で同名のフォーラムが開かれ、全国から600名が参加した。これに刺激を受けて、(財)PHD協会やタイ国障害児のための財団日本事務所など関西のNGO有志が今年の実行委員を結成。「地域に根づけ、市民が担う国際協力(or 地球まわごと学習)」をテーマに掲げ、地元淡路島の青年たちも企画段階から参加して準備が進められている。実行委員長の斉藤千宏さん(シャブラニール、京都在住)は「出会いと発見、そしてワクワクドキドキの淡路島。そんな秋の3日間になるはず」と、全国から400名の参加者を募っている。

ここでプログラム的一端を紹介すると……。同島出身で80歳を越えてもお海外協力の第一線で活躍されている中田正一博士(風の学校主宰)による基調講演や、フィリピン・タイ・インド・マレーシア・バングラデシュ・韓国などから招待された地域の活動家を囲む分科会もある。また特別ゲストとして、映画「ホビの予言」

で有名になったホピインディアン¹の1人と、関西在住の留学生多数も参加する。

今回のフォーラムを特徴づけるのは、下に示すように淡路島ならではのテーマ、人材が充分生かされた分科会が組まれていることである。

- 奇型ザルで有名なモンキーセンターを会場に現代文明を考える。
- 全国有数のかわら(瓦)産地を舞台に、地域おこしと国際化を考える。
- 同島の国産み神話を解くカギとされる^{あま}海人族の塩づくり実習体験。
- 地元で自然食・産直運動を進めているグループの主導で、農・食・暮らしを考える。
- 魚の豊富な同島で、海の汚染について考える。
- 補助金行政とODAの類似性を学ぶ。

さらに、JVC特別顧問の星野昌子を囲むでの分科会、「女性・開発・国際協力」や、移民労働者問題などのテーマも含めて計20の分科会が予定されている。また寸劇・パフォーマンスのアジア市民交流と題して、フィリピンから民衆演劇の2人や地元の障害者劇団も参加して夜の交流会がもたれるなど、肩のこらないプログラム展開になっている。

淡路島



〔申し込み方法〕

フォーラムに参加御希望の方は下記の事務局までお申し込み下さい。募集要項をお送りします。受け付けは定員(400名)になり次第締め切らせていただきます。

「市民とアジアをむすぶ国際フォーラム '89
関西実行委員会事務局」

〒543 大阪市天王寺区上本町8丁目2-6
大阪国際交流センター2階

TEL: 06-773-0256 FAX: 06-773-8422

〔参加費〕

2泊3日(5食)	10,000円
1泊2日(3食)	7,500円
1泊2日(2食)	7,000円
日帰(1食)	3,000円

マノーラー姫(後編)

王子が姫を探すためまず湖にいる隠者を訪ねると、隠者は預ったルビーの指輪を渡して言いました。

「これから7年7ヵ月7日のあいだ、長い、つらい旅をしなければならないが、わたしのサルを案内につけてあげよう」

その上隠者は秘密のお祈りや、動物や鳥の言葉まで教えてくれました。王子はサルについて北をさして進んで行きました。ジャングルをぬけ、イバラの野原をつつきり、高い山を越えて約束の年月も切れる頃、ヤクという怪物が行く手を阻みました。ヤクは人間の何倍も背が高く、息は青い炎のようでした。鼻からは煙がふき出し、もうもうと空にまい上っていましたが、王子が秘密のお祈りを唱えると、たちまちヤクはその場にひざまずきました。

次に出会ったのは、赤あかと燃えさかる炎の川でした。王子がお祈りを唱えると大きなウワバミが現れ、王子はその背中をつたって無事に向こう岸へ渡ることができました。

それから少し行くと、一本の山のような木が道をふさいでいて進めませんでした。王子はしかたなく、7年7ヵ月と6日目の晩を木の上で寝ました。

次の朝目をさますと、大きな鳥が二羽、ぺちゃくちゃさえずっているのが聞こえました。王子がじっと耳をすますと、鳥たちがこう言っているのがわかりました。

「あす、“鳥びと”の王様のところへ行ったら、うんとごちそうになれるだろうよ。少し前に人間国を離れてきた末のお姫様の清めの式があるそうだから。だが遠いところだから、今日はここで羽を休めていかなくっちゃ」

王子はサルを南へ帰し、眠り出した大きな鳥の一羽の背に登り、金や銀の羽の下に潜り込みました。

次の朝早く二羽の鳥は翼を広げて、まっすぐに“鳥びと”の王様の庭をさして飛んでいきました。

着いたときは、ちょうど鳥の娘たちが池へ水をくみにきていて、こんなことばが聞こえました。

「マノーラー姫は毎日泣きどおしよ。きっと青い山のかなたの王子様のことが忘れられないのね」

「その水はマノーラー姫のところへ持っていくのだね？」と王子が出てきて聞きました。

「はい、7日前に人間国を逃げてきた姫の清めの式がありますので」と、ひとりの娘が答えました。

「7日前？ ああ、重い水さしを運ぶのは大へんだろうね。そこまでわたしが運んであげよう」。そう言いながら、王子はルビーの指輪をそっと水さしの中に落しました。

あとでその水がマノーラー姫の体につけられたとき、ルビーの指輪が姫のひざの上に落ちました。

「まあ」とマノーラーはさげびました。「だれか知らない人に庭の池で会ったでしょう？ すぐにその方をここに連れてきてちょうだい」

そう言いつけて、マノーラーは父親の王様のところへ王子の来たことを知らせに行きました。

王様も大喜びでした。けれども、王子がどれだけマノーラーを愛しているか、自分で試してみたいと思いました。

「姫をつれて帰る前に、まず、あの庭の石の腰かけを持ち上げてみてほしい」

王子は庭へ出て行き、大きな石の腰かけの前ですわり、神様にお祈りをしました。すると体じゅうに力がわいてきて、王子はやすやすとそれを持ち上げることができました。

「よくやった」と王様は言いました。「今度は、あの7人の娘の中からそなたの選んだたった一人の娘、マノーラーを当ててみせてほしい」

7人のお姫様はみな同じよそおいをして、顔もそっくりなら、美しさも同じでした。王子が祈るような気持でながめていると、金色のチョウが飛んできて、ひとりのお姫様の頭の上をまわり、そのお姫様の手にきらりとルビーの指輪が光るのが見えました。

王子は前に進み出、姫の手をとり言いました。

「これがわたしのマノーラーです」

王様はにこりと笑って、さらに言いつけました。

「ヤシの板を7枚に、銅の板を7枚、それに鉄の板を7枚重ねたものを矢で射とおしてほしい」。

王子はもともと弓の名人ですから、これにはたじろぎませんでした。ひきしぼった弓から放った一本の矢で、みごとに射とおしてしまいました。

やんや、やんやのかっさいの声か、ヒマラヤの山々にこだまし、ストーン王子はマノーラー姫といっしょにパンチャラ・ナコーンの王国に帰って、末長くしあわせにくらしました。

(ほるぶ出版『世界むかし話⑩』より、一部改修)

JVCプロジェクト

1989年7月25日 現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～8時 毎月第2, 4土曜日 午後2時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介（代表） 林 達雄（事務局長） 熊岡路矢, 星野昌子, 前川昌代, 鶴田三芳, 加藤志保, 岩崎美佐子, 富安光子, 池島千津子, アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC 神奈川)	神奈川県内における渉外、事業計画、情報収集、資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画、運営。 7月19～20日、横浜国際都市防災会議会場にてエチオピア、ソマリアの写真パネルを展示し、資料販売も行った。		山口誠史,
日本国内	●定住難民プロジェクト パナニコム日本語学校より依頼された日本の生活紹介用スライドは、現在解説文を添えてより利用しやすいセットにするよう再検討している。 機関誌『もしもしあのね』第10号はほぼ完成した。 東京ボランティアセンターより体験学習ボランティア3名を受け入れている。定住難民についての学習会を行い、週末を利用して家庭訪問活動に入る。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金, 国際交流ホスピタリティラスト, 日本少林寺拳法連盟, ケアハウスさくら苑 チャリティーカレンダー	小野豪大, 他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている“さかさま農園”や山武ボランティア協会などと、毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア (ウォロ州)	●総合的復興促進（マーシャ） 1. 植林、土壌保全 昨年10月より今年の植林に備えて50万本の苗木を準備中である。また農業省の協力で植林予定地も近々決まる予定。 豪雨のため、新たに掘られたみぞへのチェックダムの建設、また破損した既存のチェックダムの修繕も行われている。 2. 母子保健・栄養 種々の訪問形式による指導に加えて母親学校が1月よりアダグイヤで始まった。 3. 髄膜炎に関する支援 エチオピア南部から流行しはじめた流行性脳髄膜炎がウォロ州にも広がり、コレブ地区でも500人前後の患者が見られた。JVCでは予防接種の輸送等に関する支援をコレブ、デブラザイトのクリニックに対して行っている。	CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動, モラロジー MIRC, 東京グリーン・ウォーク, 西本願寺, チャリティ・サイクル, Tree for life の会, 中部善意銀行, 朝日新聞厚生文化事業団, 毎日新聞社会文化事業団 チャリティーカレンダー	鈴木直喜, 山田 盛, 江原浩昭, 江原広美, 南部良一, 田尻真由美, イエットベルク, ソロモン, バレタ, ダニエル, エシャトー, トーマス, シュクール

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	●農業による自立促進 各農場から2～3人ずつ農民が参加し、土壌の保全に関する研修集会が開かれた。JVCから有機肥料の効果や果樹の利点などの説明をし、農民間の意見交換を行った。知識だけでなく今後いかに彼らが実施するかがポイントである。 今年の4～5月の雨期は平年の2倍を越える雨が降り、ポンプによるかんがいはいほとんどいらなかった。	UNHCR, 仏国土をつくろう会	金子一弘, シアッド, ムハボ, 磯田厚子, 中野周二, 羽田尚由, 船川秀夫, アオキ, アブディナサル, ヒレ, シュクリ
ジャララクシ・キャンプ (ヒラン郡)	●農業による自立促進 マネージメントに問題があったため2月からルークで再教育を受けていたシュクリがジャララクシにもどった。ルークでの半年の経験をいかし、プロジェクトの発展に向け彼が努力するのを期待したい。	R.I.-Japan 創価学会青年平和会議	ラジッド
カンブチア カンボット県 プノンペン カンダール県	●サンタビエツ技術学校／ワークショップ 87年8月から現在まで6台のトラックのエンジン・オーバーホールを終え、現在そのうち5台が稼働中である。ほかにブレーキを中心とした中程度の修理が約20台、溶接や塗装などの修理を入れると約120台のトラックの修理を行ってきたことになる。 カンブチア人スタッフは現在30名おり、その中には技術学校の第一期卒業生15名が含まれている。第二期の授業は88年11月から1年間の予定で開始され、52名の生徒が学んでいる。 今年度の目標は、生徒が実習の経験を十分に積めるようにするため、エンジン・車体すべてのほぼ完全な修理を20台以上行うことである。そのため、トラック10台分の新品のスベアパーツとバックシン等定期交換部品10台分が必要とされる。 ●RINE(ライン)プログラム(母子保健活動) 7月14日より第2回目の巡回母子保健活動(Mobil RINE)を開始した。Mobil RINEは村レベルの保健活動が充実するまでの暫定的手段であるが、保健サービスの提供だけでなく、村の保健従事者との連携の緊密化、技術指導、村人へのRINE活動の広報に役立っている。 7月末から始まる母子保健局主催の助産婦指導者養成コースを終えた助産婦は村レベルの準助産婦と伝統的産婆を訓練するよう期待されている。 プノンペン郡新産科病棟の建設は順調に進んでいる。 ●井戸掘り・給水 今年最初の井戸掘りは2月22日に着工され、プノンペン市にある中等教育を行う先生の養成所に井戸が完成した。その後、カンダール県内で5本の井戸が掘られた。4月以降コンボン・ソム市で7本、カンボット県で6本、コンボン・スパー県で2本の井戸掘りを行っている。	創価学会青年平和会議, モラロジ・MIRC, 立正佼成会, 日産労連, 西本願寺, 善興寺ダーナ基金, 高岡寺族青年会, 覚法寺, 「チャリティー・ウオークかながわ」, 日本少林寺拳法連盟, 毎日新聞大阪社会事業団, 大竹財団, 東京都社会福祉協議会, 国際ソロプチミスト千代田, 明るい社会づくり運動神奈川県協議会, 浄土宗東京教区青年会, 和平基金, 国際保健協力市民の会(SHARE) 仏教救援センター, 四日市商業高校, 日蓮宗宗務院, 横浜市「世界ふれあいキャンペーン」, 「お告げのフランシスコ姉妹会」, 日本海事センター, 中部善意銀行, 「カンボジア会」, チャリティーカレンダー, 堺市ロータリークラブ, 日本ボーイスカウト広島第20回	古西 勇, 馬 清, 杉江美子 [カウンター・パート] (運輸省) タック・カン, アム・ディエン, メアス・サメット, ゲット・ソーン, カム・ボラ (保健省) アン・サルン医師 (カンダール県保健局) ニム・ニエム医師 (農業省水利局) セン・ロー

活 動 地 名	活 動 内 容	支 援 団 体	担 当 者
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、ラオス・カンブチアを含む、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動 ④在タイ日本人との連絡調整	全国社会福祉協議会 電力労連	ボンピモン、カモン、 大石道子、チャタヴァデ
カオイダン （カンブチア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 19日より新しい学期がスタートした。前回は未登録難民のパンタットキャンプ移動で大幅に生徒数が減ったが、今回は173名と少し盛り返した。しかし依然として当技術学校の許容生徒数を下まわっていること、パンタットに移動した未登録難民への支援を考え、現在パンタットに技術学校を新設することを検討中である。	UNHCR, SV(Stichting Vluchteling)	ソムヨット、清水俊弘
パナニコム （第三国定住待ち キャンプ）	●日本語学校 ・日本定住予定者へのプログラム ①日本語教育 ②日本文化、習慣の紹介 ③渡航準備オリエンテーション ・他国定住予定者へのプログラム 7月21日 文化オリエンテーション 日本映画を鑑賞し、生徒がカンブチアの踊りを披露し、文化の交流をした。 7月28日 8家族33名（カンブチア難民）、3家族4名（ベトナム難民）が日本へ出発する。 日本語学校の生徒数—カンブチア 38人 ベトナム 3人	天理教千葉 R.I.-Japan	鈴木由子、竹村雅義、 熊沢ゆり、アナン、 久津輪雅、北詰秋乃
地域開発 （バンコク市内の スラム地区） （ブリラム県の M村）	●奨学金プロジェクト 88年度のレポートの作成、翻訳、発送を行っている。 7月12～16日に昨年水害のあったナコンシータマラート県を訪れ児童40人に奨学金を支給した。 ●クロントイ図書館 7月9日、スラムの住民を対象にバザーを行い古着を売った。 ●スラム生活改善プロジェクト NGO間で高速道路建設に関するミーティングを持った。 ●農村開発 M村の小学校でキノコの養殖所を作っている。 ●その他 スラム住民の権利を盛り込んだ「スラム法案」の提出に関してNGO間のミーティングを行っている。	モラロジーMIRC、 Tree for life の会、雄勝町町 内寺院会、国際 ソロプチミスト 駿河、長谷川勉 チャリティーウ ォーク、JOFIC 電力労連、から し種、チャリテ ィーカレンダー	ワティット、サムルア イ、リーラ、コメン、 今泉 恵、 ガームシン
ラオス （ヴィエンチャ ン県 ボーリー・カ ムサイ県 カムムアン県）	●生活改善指導員養成プロジェクト 3月1日に、JVCがヴィエンチャンに建てたミタパープ友好母子トレーニングセンターの開所式が行われた。今年度は5月からこのセンターで、母子保健、幼児教育の普及員を養成する。来年度は農業改良普及員を養成し、母子保健、幼児教育の普及員と同じ地域を対象に、相互に協力して農村の包括的な生活改善普及活動に当たる。	UNDP、 庭野平和財団 難民と地球の緑 を考える会 横浜インターナ ショナル・ウイ ミズクラブ スコティッシュ・ ナイト・イン・専 修寺、聖ヨゼフ 老人ホーム、堺 市ロータリークラ ブ、老人ホーム 天寿荘、チャリ ティーカレンダー	谷山博史、前田初江

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Center
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっか
けに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動
を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形が
できました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日
本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等
によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、
宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境
にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、
JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の
活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができま
す。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には
機関誌の購読料が含まれています。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

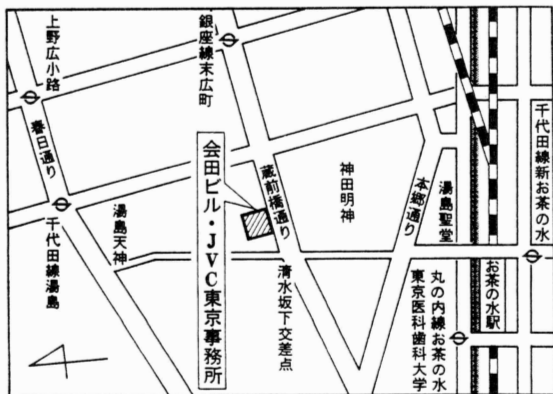
- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充
実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の
20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (7月小計 29,003円) アフリ
カの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (7月小計 166,485円)
アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金 (7月小計 4,000円) タイ国
内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンプチア募金 (7月小計 115,680円) カンプ
チア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (7月小計 11,000円) バンコ
ク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及
び図書活動に使われます。
- F. スラムの子供奨学金・基金 (7月小計 128,500円) バンコ
ク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (7月小計 1,000円) タイの
農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (7月小計 0円) 定住難
民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (7月小計 13,000円) 現場を
支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. ラオス募金 (7月小計 216,000円) ラオス
の婦人の生活向上プログラムのために使われます。
- K. 無指定募金 (7月小計 230,943円)

編集後記

▶それにしても日本に恵まれた場所にあったものだ。長雨
のあとしつこく伸びてくる庭の雑草を見ながら、雨も草も
エチオピア、ソマリアなどに分けてあげたいと思う。T & E
の原稿に追われ、とうとう草一本抜けないでタイへ出発。
雑草とともに共存していると思えば、ま、いいか。(岩崎み)
▶アジアやアフリカの片隅には自分の故郷以上に故郷を感じ
させる場所がある。水、土、森等が大切に育まれてきた
ために、昔ながらに変わぬ土地である。そんな故郷が特に
ここ2~3年急激に壊されている。故郷だけは変わってほ
しくないと思っている私たち自身が無意識のうちに壊して
いるのかもしれない。(林)



▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- 東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)
- 加入者名—JVC東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (7月小計 166名 1,467,066円)
犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設け
ることになりました。この募金はエチオピアの植林プロ
ジェクトに使われます。

1989年8月20日発行(毎月20日発行)

編集人 岩崎美佐子 林 達雄 前川 昌代

発行人 林 達雄

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎ 03(834)2388 FAX: 03(835)0519

Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易セ
ンタービル9F (財)神奈川県国際交流協
会内 ☎ 045(671)7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。